

薪

週末林業グループ、 荒れた里山林を 薪に変える

神奈川県大磯町・大磯きこりラボラトリー

文・写真=編集部

放置された広葉樹の里山林が獣害の原因になっている。その解決のため、大磯町は2019年度から「兼業林家」を育成する自伐型林業研修を開講（21年夏46号p128の記事を参照）。参加者の有志が「大磯きこりラボラトリー」を結成し、里山管理と薪販売を始めた。



自伐型林業研修の現場。大磯町は町面積の3分の1が森林で、その9割が広葉樹の山
写真=高木あつ子



薪棚ときこりラボのメンバー。右から2人目が代表・山中紀幸さん

2019年秋に3人で結成した「大磯きこりラボラトリー」。大磯町を拠点に周辺市町の里山林にも出向いて活動する木こりグループだ。町が主催する自伐型林業研修の参加者を中心に、きこりラボのホームページやフェイスブックを見た人がメンバーに加わり、なんと70人にまで増えた。主に週末、月3日ほど活動し、毎回10人ほど集まる。

代表の山中紀幸さん（44歳）は関西生まれだが、両親が大磯出身なので子供の頃から盆や正月は大磯で過ごした。成人して勤め先のある東京に住んでいたが、6年ほど前、2人目の子供が生まれたタイミングで大磯に引っ越してきた。幼い頃よく遊んだ里山が荒れているのに気づき、それが鳥獣害の温床であることや、放置すると風倒木や土砂災害の危険性が高まることを耳にした。

そんな時に自伐型林業を知り、小規模でも自分で山を管理できるようになりたいと、埼玉県飯能市にある「地球のしごとと大学」の休日コースで自伐型林業を学んだ。その後、町でも林業研修が始まることを知って参加し、その勢いできこりラボを立ち上げたのだ。

「兼業林家」が山林整備を担う

きこりラボのメンバーは、ほとんどが会社員だ。森林インストラクターやキャンプ場の管理など普段から山と関わる仕事をしている人もいるし、製薬会社や雑貨屋など山とあまり接点のない業種の人もいる。

そんな彼らに共通するのは、「山仕事がしたい」「研修で学んだことをトレーニングする機会がほしい」という点だが、メンバーは誰も山を持っていない。では、どうやって山の整備をするのかというと、親戚やその知り合いづてに山主を紹介してもらう。今回の現場の山主・小清水茂寿さん（74歳）ともそうやって知り合った。また、林業研修は町の広報でも取り上げられているので、町を通じて依頼してくる山主もいる。山林整備はこれまでに7人の依頼を受けた。

整備を頼まれたら、どんな山にしたいのか聞き取りながら作業する。直売所で野菜を販売する小清水さんからは、「原木シイタケをつくって売りたいから、ホダ木になるコナラ、クヌギはできるだけ残したい」という要望があったので、ケ